

A Happy New Year 2008

SEANET2007ランパン参加記

JE3BEQ 宮本誠一

<前日の一人旅>

関空発の深夜便でバンコック経由チェンマイへ出発しが、深夜の関空は寂しい限りで勢いを欠いている大阪を感じた。早朝チェンマイに着いてポンワットさん (HS1XIM) 池の暖かい出迎えを受け、マレーシアからの一組と合流してバスで2時間のランパンに向かうことになった。ポンワットさんは一人旅の私に自分の車に乗るように誘ってくれ、途中激辛のシーフーズ丼の昼食をご馳走になりランパンに向かった。彼は助手席の私に電動のマッサージ機を勧め、おかげで長時間のフライトで凝り固まった腰が気持ちよくなった。このドライブ必携品を、帰ったら早速手に入れたと思った。

ポンワットさんが案内してくれたホテルは、当初予定の会場のホテルではなくリバーサイドゲストハウスという別のホテルであった。そこにチダさん (HS1ASC) が待っていて、すでにヨーロッパからの先着組みが再会を楽しんでいた。このホテルにはテレビ・電話などの備え付けが何もなく年数を経た古い建物であったが、至る所花に飾られたそれなりに大変美しいリバーサイドのホテルであった。会場のホテルは満室との連絡もあったので迷わずここに泊まることにしたが、結果的に前泊組み全員がここに泊まったので賑やかで楽しい思い出の場所になった。近くのレストランでの夕食にはポンワットさんも駆けつけ、彼のトークショー (彼は普通に話していても漫談を聞いているようで、ついつい吹き出して失礼) で話が弾んだ。その後マレーシアの人たちが足マッサージに誘ってくれたが、店にはマッサージ師が足らず諦めて戻り、誰かが持ってきたオールドパーで杯を傾けながら異国の秋の夜長を語り合った。

<プログラム初日>

歓迎パーティーは、三々五々集合してくるメンバーのウォーミングアップと思いきや、オープニングセレモニーとある通りフォーマルな来賓の挨拶があり、食事内容・進行とも正式パーティーそのものであった。午後7時半から開宴のところ、遠路ぎざぎざに到着した人達にとっては着替えもできず苦情が出かかって説得の依頼を受けたが、結果的に気持ちよくスタートできコミティーも胸を撫で下ろしたと思う。これは盛りだくさんの内容を一杯楽しんでもらおうとしたコミティーの気持ちの現われで、何回か同様の場面があったが結果的にポンワットさんとチダさんの気持ちが通じて大成功につながった。



<プログラム二日目>

前夜のパーティーが夜中まであったので、皆さん少し眠たかった。結果的には三日三晩夜遅くまでパーティーが続くことになり、翌朝のプログラム開始時間8時が早すぎるとブーイングが出るくらい連日フル稼働のスケジュールを計画されていた。

毎朝小一時間待たされて出発したが、それでも寝坊してプログラムに参加できなかったり、滑り込みで間に合う人が続出した。ふと見るとホテルの外には二人乗りの馬車が50台くらい待ち受けていて、パトカーも待機している。何かイベントがあるのかなと思っていたら、9時になってようやく我々に乗るようにアナウンスがあり、ランパン駅まで晴れやかに行進することになった。

パトカーは馬車の行進を先導し、交差点では手信号で馬車優先の交通整理をしてくれVIP気分であった。ランパンの町の人たちにとってもこんなに沢山の馬車が列を連ねるのは珍しいのか、沿道の人目を釘付けにした。乗っている我々はもちろん沿道の人も手を振ってくれ、共にハッピーだった。ランパン駅で馬車を降り、黄色のSEANETシャツを着て駅前集合写真を撮った。黄色の由来は、王様を慕う国民が、毎週決まった曜日に王様の長寿を願って、王様の好きな色の黄色の上着姿になるとのことである。

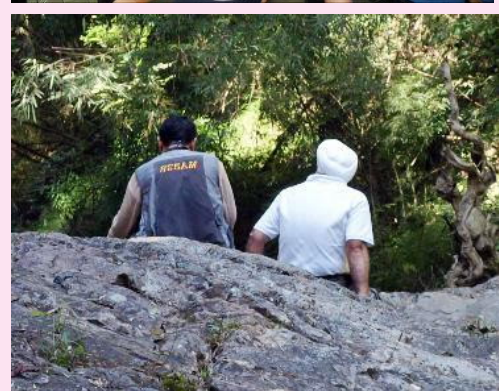


プロのカメラマンが一眼レフで何枚かに分けて撮っている様子だったので、デジタルで撮って後で合成するのだと想像はできたが、A3サイズより大きな持ち運びに困る集合写真をもらうことになった上、ちょうど真ん中にいた私のところで合成されていたので、只でさえ大きくて気にしている私の顔がさらに膨れて何とかして欲しい気持ちであった。その後バスで観光に出かけた。3年前のバンコックでのSEANETのときもそうだったが、タイの道路は大変良くて結構スピードを出す。しかし今回は疾走に近いスピードにやばいのではないかと気をもんでいた。なんとパトカーが先導しているではないか。後で聞いたら、タイではお金を払って交通整理やパトカーの先導を頼めると言う。結局その後のバスツアーも快適そのものであった。ランバンで有名な、愛らしい象たち、陶器や瓦のセラミック産業、広大な石炭の露天掘りや電力プラントの様子などの社会見学も織り込んで勉強もした。夜は野外に設営されたパーティー会場での宴会となった。コンテストの表彰、各種記念品の授与 (SEANET大阪にも荒川さんが代表して戴いた)のセレモニーがあり、タイのダンス鑑賞、各国の余興、全員のフォークダンスで沸いた。各国の余興はドレスアップパーティーの翌日と踏んでいたが、念のため歌詞を用意していたところやっぱお鉢が回ってきた。日本人15人全員で歌おうと野外舞台上上がったが、その夜は震えるほど寒くて半袖の人は建物の奥に入っていたため気づかず、仕方なく残りの人たちで「旅愁」を歌った。南国の秋の「旅愁」は少し感傷的ではあったが、皆さんなんとも言えない良い気分であつた。また聴衆からは素晴らしいと声がかかった。童心に返って楽しんだのは、寸胴の提灯みたいなランタンをミニチュアの熱気球よろしく、それぞれ思いをこめて飛ばして遊んだことである。夜空の星の輝きは日本と変わりがなかったが、無数のランタンの星は幻想的で美しかった。皆さんなんとも言えない満足な気持ちでホテルに戻った。



< プログラム三日目 >

ジェソン国立公園では、青森県の「奥入瀬」を思わせる南国熱帯の美しい渓流と滝、そして温泉を楽しむことができた。チャエさん (HL1KDW)、Dr.ケンさん (9M2KN)、ポンワットさんらが渓流沿いの道を歩きながら話をしていましたが、最終日に提案されたSEANET2009 Seoulの構想も話題の中にあつたろう。ポンワットさんと言えば、間が抜けている部分を除いた「柴又の寅さん」のイメージがぴったりである。親切で愉快で人をとことん楽しくする。今回の企画は彼の大車輪の努力によるが、大きなショルダーバッグを引っ提げひっきりなしでかかってくる2台の携帯電話をさばきながら、一緒に渓流を散策した。ふとアンゲルにケンさんとポンワットさんの後姿が入り、疲れたポンワットさんをケンさんが労わっているように見えたので、「写真に撮り寂しい二人の男」と題してどうだと見せたら、二人から怒ったように「元氣一杯心配ご無用」と返ってきた。温泉では、煮立っている湯溜まりに何の柵もなく近づけるのには驚いた。日本では柵だらけで自然への触れ合いが中途半端になり楽しみも少ないが、「自分の体は自分で守る」自己責任の考えを持たないと、ガードに守られる意識が蔓延しているいろんなことに対する挑戦マインド育たないと感心(心配)したりした。温泉に浸かる人、温泉卵を作って賞味する人それぞれ愉しんだが、写真撮影を切り上げてバスに戻ろうとする道すがら、ケンさんが一人寂しく足湯を愉しんでいるに出くわした。時間が迫っているので彼が足湯から出るのを待っていると、まだ時間はあるのでお前も一緒に入れと言う。二人でなんとも気持ちの癒される一時であった。足を拭いて靴下をはいているとき、彼は素足にサンダル姿を見せてこんなときはこれが一番と自慢した。来年のサバでのSEANETには、私もサンダルを用意していくつもりである。



最後の夜は、恒例の各国の民族衣装に衣替えしたドレスアップパーティーが、ランパン州のお祭りの広場に設定されていた。夕方の明るいうちは、お祭りに参加しているタイの人たちの伝統的な衣装と米村さんご夫妻 (JA1BRK、JR1FBE) の和服姿をはじめとする各国の衣装が融合して、写真を撮り合って交流した。吉井さん (JA9AG) の袴姿はスター並みのもてかたであった。暗くなるに従って寺院への階段がくっきりとライトアップされ、寺院の輪郭が浮かび上がった。レンガ造りの壁面に映像が投影され、その前で笛や太鼓の音で民族舞踊が繰り上げられるのを、境内の屋台に囲まれた特設席から観覧した。大勢の観客は整然とこの歴史絵巻を堪能していた。元々の企画ではこの屋台で夕食を済ますと言っ触れ込みのようであったが、ローカルな食べ物ばかりと衛生的な面を気にしてしまい、とても我々参加者の夕食にはなりえず皆に戸惑いが走った。しかし祭りのメインイベント終了とともに全員集合の音がかり、次なる宴会場の中華料理店に向かった。百人を超える我々の宴会場をわずか2時間程度で準備するなど無理ではないかと考えると、我々を少しビックリさせる遊び心がコミッティーにあったのではないかと思ったりした。余興の冒頭ゴッドフリーさん (9M6GY) によるSEANETの映写があった。なんと「SEANET大阪」の特集版を制作してくれていたのである。大阪に来てくれた人には懐かしかったらうし、初めてみた人には大変宣伝になった。もちろん終了と同時に私は彼のところに飛んでいき、皆の前で握手してお礼を述べ労をねぎらった。またSEANET大阪コミッティーからの寄付金3万円を以前ボンワットさんに渡していたが、突然この場で彼からそのことを紹介され、SEANET大阪が今回の参加者の記憶にも残り、名実ともに完了したのだとつくづく思った。余興が佳境に達したところで吉井さんの恒例の舞にリクエストがかり、舞台が狭くて無理なところを演じて新境地を開かれるとともに、喝采を浴びられた。



<お見舞い>

パーティーからの帰り道の午後11時半ごろ、ボンワットさんが、妻が今日手術をした、今から会いに行くので一緒に来てくれないかとボツリと洩らした。そんなことを今まで一言も話さなかった彼の心情を考えると、少しでも彼の力になればと心から思った。そしてケンさん夫妻、チャエさんと一緒に深夜お見舞いに行った。手術直後の奥さんはしっかり話をされ、突然の真夜中の訪問にもかかわらず喜んでいただいた。そばには息子さんが付き添って頼もしく感じた。付き添いのベッドには娘さんが安心したのか寝入っている様子であった。奥さんや息子さんとの会話を聞いていて、ボンワットさんの優しさとすばらしい家庭の雰囲気を感じた。一日も早い全快を心から念じつつホテルに戻った。

